



研究論文 (Articles)

刑務所ラジオにおける“心の癒し”の可能性^{1) 2)}

——番組制作・放送関係者のナラティブを通して——

近 藤 優 佳

(立命館大学大学院 人間科学研究科)

The Psychological Healing Potential of Prison Radio —Through the Narratives of People Involved in Program Production and Broadcasting—

KONDO Yuka

(Graduate School of Human Science Ritsumeikan University)

Prison radio, a request program broadcast within prisons, serves as a critical avenue for inmates' psychological well-being. This study delves into its profound impact, particularly in fostering "psychological healing" among inmates, elucidating its core elements. A field-based participant observation approach was employed across five prisons and affiliated community FM stations involved in the production and broadcasting of prison radio. The analysis comprised 49 episodes of "psychological healing" curated by 11 research collaborators, utilizing a combination of structural and thematic narrative analyses. The findings underscore that "psychological healing" through prison radio encompasses the cultivation of experiences marked by affirmation and connection, bridging inmates to both their peers and the outside world. This process catalyzes transformative shifts, alleviating feelings of loneliness and promoting introspective thinking. Notably, the very act of tuning in and engaging through request cards is essential to foster "psychological healing" for the inmates. The importance of these acts reveals the significance of utilizing radio to provide "psychological healing" to inmates. In conclusion, the psychological role of prison radio provides a platform for self-expression—a fundamental precursor to rehabilitative education, all within a secure framework. The "psychological healing" provided to inmates through this study holds promise in facilitating inmates' reintegration into society, charting a path towards redemption and renewal.

刑務所ラジオとは、刑務所内で放送される受刑者対象のリクエスト番組である。本研究では、受刑者にもたらされる“心の癒し”に着目し、その内容を明らかにすることで刑務所ラジオが担う心理的役割を検討する。調査方法は、5つの刑務所ラジオの番組制作・放送に携わる刑務所やコミュニティFMをフィールドとした参与観察である。分析対象は、研究協力者11名から得られた49例の“心の癒し”に関連するエピソードであり、構造とテーマを焦点化するためのナラティブ分析を用いた。その結果、刑務所ラジオにおける“心の癒し”とは、外部や他者と繋がる場の中で承認・受容される体験を積み重ね、孤独感の緩和や内省的思考の促進などの変化を生じさせることだとわかった。また、受刑者に“心の癒し”をもたらすには、ラジオの特性やリクエストカードを書いて聴く行為が不可欠であり、刑務所「ラジオ」である意味についても明らかとなった。結論として、刑務所ラジオの心理的役割とは、安全な枠組みの中で贖罪教育の前提となる自己表現を保障することであり、本研究によって受刑者にもたらされる“心の癒し”が社会復帰の一助となる可能性が見出された。

Key Words : Prison, Radio, Participant Observation, Narrative Methods, Healing

キーワード：刑務所，ラジオ，参与観察，ナラティブ分析，癒し

1) 本研究は、立命館大学産業社会学部の卒業論文の一部を加筆、修正している。

2) 本研究は、公益信託高橋信三記念放送文化振興基金（2017年度）の助成を受けている。

I 緒言

2021年10月7日『塀の中のラジオ～贖罪と更生岡山刑務所から』（RSK山陽放送）が放送文化基金賞ラジオ番組部門において最優秀賞を受賞した。刑務所内で放送されるリクエスト番組（以下、刑務所ラジオとする）に焦点を当てたこの番組は、受刑者の心情や刑務所が抱える本質的な課題に迫った点が高く評価され、「ラジオの力」が再注目を集めるきっかけとなった。刑務所ラジオとは受刑者を主な聴取対象として制作・放送を行う音声番組である。その位置づけは各刑務所が独自に取り組む矯正処遇（受刑者の資質や環境に応じて改善更生の意欲の喚起及び社会生活に適応する能力の育成を図る）の一環であり、企画部門の職員を中心に地域のコミュニティFMやボランティア等と連携しながら実施している。2023年4月現在、刑務所ラジオの実施が確認できた刑務所は国内で8箇所あり、各刑務所の収容定員及び処遇指標は多岐に渡っている。番組は通常のラジオと同じくDJ（ディスクジョッキー）が進行し、リクエストカードに綴られたメッセージをDJが読み上げてからリクエスト曲を流す「リクエスト番組形式」が採用されている。放送は刑務所内の放送設備を使って行われ、受刑者は決められた時間、決められた場所で一斉に番組を聴取することとなる。原則として刑務所ラジオは刑務所内専用の音声番組であり、刑務所外への放送は想定されていないが、その取り組みや番組の一部は報道番組や新聞記事等を通して一般にも公開されている。

1. 国内における刑務所ラジオ研究の変遷

国内における刑務所ラジオ研究の変遷について、筆者が行った調査（近藤，2017）をもとに報告する。

刑務所ラジオの実施に関しては各刑務所の方針に委ねられており、その詳細は各更生施設を所管する法務省行政局でも把握しきれていない。筆者が本研究を開始した2016年8月現在では刑務所ラジオを主題とした学術論文も確認できず、刑務所ラジオに関する情報は報道番組や新聞記事等（松井弘，1986参照）を通じた収集に限られていた。そこで、スノーボールサンプリングによって調査可能な現場（以下、フィールドとする）を探ったところ、A～Eの5つの刑務所ラジオを対象に調査（以下、これを予備的研究とする）を実施することができた。調査期間は2016年8月～2020年5月であり、刑務所ラジオの具体的な取り組みについて聴き取る半構造化面接を実施した。研究協力者は各刑務所ラジオに携わる刑務所職員、コミュニティFM職員、DJの7名であり、その都度調査可能だった者に研究協力を依頼した（表1参照）。半構造化面接で聴き取った内容は、①番組放送に至った経緯、②番組放送の目的、③番組放送前後を比較した受刑者の変化、④刑務所ラジオの役割、⑤番組放送に対する課題や今後の展望の5項目であった。

スノーボールサンプリング及び予備的研究の調査手順は以下の通りとした。(1) 報道番組や新聞記事等を通して収集できた情報から刑務所ラジオの制作・放送に携わるコミュニティFMやDJに電話または封書で問い合わせを行い、研究内容の説明と調査への協力を依頼した。(2) 承諾を得てから訪問日程の調整を行い、調査前に研究協力を依頼する文書と研究計画書、上記5項目を送付した。なお、研究協力者がコミュニティFMに所属する場合（番組ディレクターやアナウンサー等）はコミュニティFM、ボランティアのDJである場合は個人宅を送付先とした。(3) 研究協力者から指定された場所（コミュ

表1 予備的研究の研究協力者

所属	研究協力者	属性
A 刑務所ラジオ	A1, A2	DJ, 刑務官
B 刑務所ラジオ	B1	刑務所長
C 刑務所ラジオ	C1, C2	刑務官, 元刑務所長
D 刑務所ラジオ	D1	番組ディレクター
E 刑務所ラジオ	E1	番組ディレクター

ニティ FM や DJ の自宅、協力関係にある地元放送局等）に訪問して半構造化面接を実施し、上記 5 項目について聴き取った。(4) 研究協力者から他の関係者を紹介してもらい、調査可能なフィールドが見つからなくなるまで (1) ～ (3) を繰り返した。(4) で刑務所職員（刑務所ラジオを担当する刑務官、刑務所長等）の紹介を受けた場合は、承諾を得てから所属先の刑務所長宛に (2) の手続きを行い、研究協力者が所属する刑務所に訪問して (3) を実施した。ただし、研究協力者によっては半構造化面接の時間を十分に確保することが難しく、回答を文書で手渡される場合もあった。以上の調査をもとに刑務所ラジオの実施概要を情報保護の観点に配慮しつつ表 2 のようにまとめた。その結果、予備的研究では以下の 3 点が明らかになった。

1) リクエストの仕組みと投稿者の特徴

受刑者の内面を探る上でリクエストされた曲目とリクエストカードに記入されたメッセージを分析することは重要な意味を持つ。しかし、原則として刑務所ラジオは施設内の限られた受刑者に向けた企画であり、不正なやり取りの防止や受刑者の同意の観点からコンテンツの開示は困難であった。こういった限界をふまえ、本研究では刑務所ラジオのリクエストの仕組みと投稿者の特徴を記述するにとどめている。

表 2 で示す通り、同じリクエスト番組であってもリクエストする際のテーマの有無や募集期間、番組で採用するリクエストを誰が選ぶのかには違いが見られた。リクエストカードには、曲名、歌手名、労役で働く工場名、姓名のイニシャル（呼称番号やラジオネームを書く場合もある）、数行のメッセージ

表 2 刑務所ラジオ実施概要（2022 年 12 月 1 日現在）

	A 刑務所	B 刑務所	C 刑務所	D 刑務所	E 刑務所
収容定員	約 600 名	約 1000 名	約 500 名	約 3000 名	約 2500 名
処遇指標（※）	B	LA	W・WF・WJ	B・F・M・P	B・F・M・P
継続年数	43 年	42 年	16 年	16 年	11 年
制作担当	自主制作	自主制作	自主制作	コミュニティ FM	コミュニティ FM
放送の目的	余暇時間のマンネリ化した娯楽の解消	贖罪意識を高め社会復帰の意思を確認すること	余暇時間の援助	地域貢献の一環	心の安定を支え社会の偏見をなくす一助となること
放送形態	生放送	録音	録音	生放送	録音
外部放送	なし	なし	なし	なし	あり
番組 DJ	教誨師／ 篤志面接委員 他	受刑者 (放送委員が担当)	教誨師／ 篤志面接委員 他	アナウンサー	技術指導者
放送頻度	月 1 回	毎週	毎週	月 1 回	月 2 回
放送時間	90 分	30 分	30 分	60 分	30 分
放送時間帯	19:30～21:00 (余暇時間)	21:00～21:30 (消灯・就寝後)	16:50～17:20 (夕食時間)	14:00～15:00 (作業時間内)	11:30～12:00 (昼食時間)
番組の形式	リクエスト番組				
リクエストテーマ	あり	なし	なし	あり	なし
リクエスト募集期間	毎月	いつでも可能	年 1 回 1 週間	工場ごとに毎月	工場ごとに毎月
リクエスト投稿数	毎月 50～100 通	月に最大 50～60 通	年間 400 枚以上	毎月 40～45 通	多い時で月 100 通
リクエストの選別	刑務官	DJ	刑務官	刑務官	DJ・ディレクター

(※) 外山 (2010) より、受刑者の処遇指標は犯罪傾向の進捗による処遇指標（A 指標、B 指標）及び属性／性別、国籍、罪名、年齢及び執行刑期などによる処遇指標（W 指標、F 指標、J 指標、L 指標、M 指標、P 指標など）に分類される。A 指標が初犯、犯罪傾向の進んでいない者を指すのに対し、B 指標は累犯、犯罪傾向の進んでいる者（暴力団関係者含）を指す。W 指標は女子、F 指標は日本人と異なる処遇を必要とする外国人、J 指標は少年院への収容を必要としない少年、L 指標はロング＝執行刑期が 10 年以上の者、M 指標は精神上的の疾病または障害を有するため、医療を主として行う刑事施設に収容する必要があると認められる者、P 指標は身体上の疾患または障害を有するため、医療を主として行う刑事施設に収容する必要があると認められる者を指す。

などが書き込めるようになっており、放送では曲名、歌手名、メッセージ、ラジオネーム代わりのイニシャルが読み上げられることが多い。リクエストされる曲は、リクエストテーマに沿った思い入れのある曲か余暇時間に観賞したテレビやラジオから仕入れた流行の曲が中心であり、研究協力者からは「受刑者が高齢化しているにも関わらず演歌が少なく、ポップな曲が多い」といった特徴も語られた。そのため、リクエスト曲から投稿者の年代を推定しにくい状態にあった。A・D 刑務所ラジオのリクエストテーマは幅広く設定されており、季節を感じさせるもの（「春と言えば」「夏にしたいこと」「クリスマス」）や誰でも素直に語りやすいもの（「食べ物」「好きなスポーツ」「行ってみたい国」）、他者との関わりを示すもの（「お母さん」「感謝している人」「忘れられない味」）やこれまでの人生を振り返るもの（「思い出の場所」「大切なもの」「今度生まれ変わったら」）などが一例として挙げられた。どの刑務所ラジオでもリクエストカードの投稿は自由であり、記入は余暇の時間帯に各自で行われていた。同じ受刑者が繰り返し投稿する場合もあるが、出所前の受刑者からの投稿が増える傾向にあった。また、採用するリクエストカードを選別する際は、投稿者に偏りが生じないように工場や年代ごとに募集したり、メッセージの巧さではなく選曲を重視したりするなど各刑務所で工夫がなされていた。しかし、1回の放送で採用できるリクエストカードは30分番組で3～6枚、90分番組で15～16枚程度である。そのため、匿名で集められた聴取者アンケートには「リクエストカードを採用してもらえなかった」「リクエスト曲が時間の都合により途中で終わってしまった」と苦情が寄せられ、刑務官が元受刑者から聴き取った語りの中には「期待することは何もない」「良い子ぶらなければ」「本音なんて言えない」など否定的な意見も多かった。その一方、「（自分の話を）聴いてくれたらそれでいい」「一緒にええやんって言うてくれたら」「一瞬でも変わろうとするその瞬間を否定しないで」といった意見も少数ながら寄せられていた。

2) 刑務所ラジオがもつ多様性

表2で示す通り、刑務所ラジオは矯正処遇の一環として位置づけられるものの、その取り組み方は様々であり、収容定員や処遇指標が類似する刑務所であっても放送の目的には違いが見られた。一例として、ともに地域のコミュニティFMが番組制作を行うD刑務所ラジオとE刑務所ラジオを比較してみる。D刑務所ラジオを制作するコミュニティFMでは、放送の目的を「地域貢献の一環」と定めており、「受刑者の社会更生を意識した放送ではない、今この瞬間を楽しんでもらえる番組作り」を重視していた。その一方、E刑務所ラジオを制作するコミュニティFMは、全国的にも珍しい外部放送を行っていることから刑務所ラジオをコミュニティFMの番組コンテンツの一つとみなしている。そのため、「受刑者に番組を楽しんでもらうと同時に刑務所の中での暮らしや受刑者の思いを積極的に地域に伝える」ことを放送の目的とする傍らコミュニティFMの電波を通じて「受刑者が社会復帰するための受け皿の必要性」を地域に訴えていた。刑務所ラジオが多様化する背景の一つに、横の繋がりが薄く、刑務所ラジオについて情報交換をする機会がないといった課題がある。予備的研究を開始した時点では、刑務所ラジオを担当している刑務官でさえ、「同所以外に刑務所ラジオが放送されていることを知らなかった」「どの刑務所がどのような番組を放送しているかわからない」状態にあり、その結果、各刑務所の方針や制作担当者の思いが番組に強く反映されていることがわかった。

3) 刑務所ラジオに期待される“心の癒し”

上述の通り、多様性を持つ刑務所ラジオだが、番組を通して受刑者に“心の癒し”をもたらしそうとしている点は共通していた。例えば、A刑務所ラジオは「余暇時間のマンネリ化した娯楽の解消」とともに「受刑者の心の灯となること」を目指している。「心の灯とは、受刑者の心にピンスポットを当てること」であり、A刑務所ラジオでは受刑者の思いに焦点を当て、その心を理解しようとするのが“心の癒し”になると考えられていた。また、どの刑務所ラジオも番組内で法律や道徳的な悪を説いたり、受刑者の

罪の意識に切り込んだりすることはなく、贖罪教育とは明確な棲み分けを行っていた。したがって、刑務所ラジオが贖罪教育とはまた別の観点から受刑者の社会復帰を支援しようとしていることがわかった。

以上が予備的研究を通して浮かび上がった刑務所ラジオの具体的な取り組みである。その後、社会学及び情報学の領域で坂田（2019）、芳賀（2022）による学術論文が発表され、各刑務所ラジオの個別的な取り組みに関しては『刑政』（秋田行範、岩松真也、村崎誠三、2018 参照）で特集が組まれた。坂田（2019）は、メディア史の観点から「限定された（閉じた）」空間と音声メディアの関係性を考察し、刑務所ラジオを「マス・コミュニケーションによる効率的な受刑者教育であり、そこに参加する受刑者たちの内面への好影響が期待されている」と評価した。その一方、「少数の刑務官によって作られた多数の受刑者に対する更生教育システム」の側面を指摘し、刑務所内ラジオを「一定の規律をもって実施される『訓練』」であり、「自身の内面を見つめ続けなければならない『自己監視』の装置とも考えられる」とした。坂田（2019）の研究を受け、芳賀（2022）は「番組内のコミュニケーションが、受刑者にとってどのような意味を持つのか」をケア・コミュニケーション（小玉美意子、2012 参照）の観点から考察した。芳賀（2022）は、名古屋刑務所豊橋刑務支所における事例調査から「受刑者が刑期中も社会や他者とのつながりを保つコミュニケーションの回路の一つ」として刑務所ラジオの可能性を探った（芳賀美幸、2024 参照）。その一方、外部放送の是非を問う中で「犯罪被害者を含む、様々な感情を持った人に配慮した内容が求められ、そのことが受刑者が自由に物語を語る行為を阻むというハードルも明らかになった」と受刑者の社会復帰を支援する上で直面する課題についても言及した。

これらの研究により、国内における刑務所ラジオの個別的取り組みや矯正処遇の視点から刑務所ラジオが担う社会的役割については概ね明らかになってきた。その一方、刑務所ラジオはこれまで受刑者の社会復帰を直接的に支援する教育プログラムとして捉えられてきたこともあり、刑務所ラジオが担う心

理的な役割について明らかにした研究はまだない。そこで筆者は臨床心理学や対人援助の視点から、刑務所ラジオがもたらそうとしている“心の癒し”が受刑者に変化を生じさせ、その変化が間接的に社会復帰の一助となる立場をとることとした。また、先行研究が DJ や刑務所職員を対象としたヒアリング、または半構造化インタビューによる個別的な事例調査に基づいているのに対し、本研究では複数のフィールドへの参与観察に基づくことで、多様な関係者の語りを通して刑務所ラジオにおける“心の癒し”とは何かについて検討を行う。

2. 本研究の目的

本研究では、刑務所ラジオにおける“心の癒し”とは何かを臨床心理学や対人援助の視点から探究するとともに、受刑者の社会復帰において刑務所ラジオという独自性のある取り組みが維持されていくことの心理的な役割について明らかにする。

Ⅱ 方法

1. 対象

参与観察のフィールドは、予備的研究を実施した A ～ E 刑務所ラジオの制作・放送に携わる刑務所、コミュニティ FM を対象とした。フィールドとなった施設への訪問回数（電話、メール、封書等による交流は除外する）は表 3 の通りである。研究協力者は予備的研究における研究協力者 7 名（表 1 参照）を含めた 11 名であり、その都度調査可能だった刑務所職員、コミュニティ FM 職員、DJ に依頼した（表 3 参照）。訪問回数及び研究協力者の属性にばらつきが見られるのは、各刑務所の方針が由来していた。訪問回数が最も多い A 刑務所は、DJ の力添えと調査当時の刑務所長が外部への情報公開を積極的に行っていたことから定期的な訪問の許可を得ることができた。また、刑務所ラジオの制作・放送を誰が担当するのも各刑務所によって異なっていた。特に DJ はボランティアに頼っているところが多いため、一律に刑務所ラジオを実施することが難しい側面もあった。

表 3 研究対象

所属	訪問先	訪問回数	研究協力者	属性
A 刑務所ラジオ	A 刑務所	13 回	A1	DJ
			A2	刑務官
			A3	元刑務所長
B 刑務所ラジオ	B 刑務所	2 回	B1	刑務所長
			B2	DJ
C 刑務所ラジオ	C 刑務所	1 回	C1	刑務官
			C2	元刑務所長
			C3	DJ
D 刑務所ラジオ	コミュニティ FM	1 回	D1	番組ディレクター
E 刑務所ラジオ	コミュニティ FM	2 回	E1	番組ディレクター
			E2	DJ

2. 調査期間

調査期間は 2016 年 8 月～2021 年 12 月の 5 年 4 か月であった。調査期間は施設や研究協力者の都合により、予備的研究の調査期間と一部重複するものもあった。

3. 調査方法及び内容

研究デザインは、参与観察による質的記述的研究とした。参与観察では、フィールドとなった施設内の見学、番組収録や生放送への立ち合い、研究協力者への自由面接を実施した。本研究における自由面接とは以下の通りである。面接は刑務所内の会議室や放送室、コミュニティ FM のスタジオや DJ の自宅等、研究協力者のプライバシーが確保される場所で行った。各刑務所の方針にともないフィールドとなる施設への訪問回数や面接の設定（面接場所、研究協力者 1 人あたりの面接回数等）は構造化できなかったが、面接の所要時間は 1 回につき最大 60 分以内で終了するよう配慮した。面接の内容には、研究協力者に特定の指示を与えず自由に語ってもらったことに加え、リクエストカードや聴取者アンケートに基づいて語られた体験について詳細に聴き取ったこと、フィールド内での会話、研究協力者との交流の中で筆者が感じ取ったことも含んでいる。受刑者本人への聴き取りは当事者 DJ である B2 を除いて実施できなかったため、本研究では「受刑者の語りを聴き取った研究協力者の語り」を受刑者の語りを

間接的に探るための手がかりとした。B2 は受刑者でありながら放送委員として刑務所ラジオに携わる立場にあったため、聴き取りは刑務官同席で実施した。B2 に語ってもらう内容は、本番までにどのような準備をしてきたのか、その過程でどのようなことを感じたのかに限定され、筆者は最小限の受け答えのみで聴き手に徹するよう注意した。データの取り扱いについては録音機器の使用が制限されていたため、各施設の担当者と協議の上、筆者がその場で聴き取って書き起こした記録のみ持ち出す許可を得た。記録は可能な限り逐語的に書き起こし、面接で語られた内容と研究協力者から提供してもらった資料（パンフレット、新聞や雑誌の記事、ニュース映像、企画書、番組の進行表等）と合わせてフィールドノートを作成した。フィールドノートは研究協力者の承諾を得ながら修正を繰り返し、客観的な事実に基づいた記述となるよう配慮した。本研究ではこれらをデータとし、刑務所ラジオにおける“心の癒し”とは何かを描く方法をとった。

4. 分析方法

刑務所ラジオにおける“心の癒し”とは何かを探究するには、研究協力者が“心の癒し”にまつわる経験を語る際に共通して見られる構造上の要素を抽出する必要がある。その一方、複数のフィールドで収集した情報を混合してデータ化することにより各刑務所の多様な実践の結果である個別性を損なう

恐れがあった。そこで、本研究では Riessman (2008) の定義する構造とテーマを焦点化するためのナラティブ分析を採用し、構造分析とテーマ分析を組み合わせることで語りの構造とそこで語られた内容の両面に着目した。具体的な手順は、Labov & Waletzky (1967) によって考案され、田口・宮坂 (2015, 2019) が用いた方法を参考にした。まず、フィールドノートを精読し、“心の癒し”に関連して語られているエピソードを抜き出して時系列に配置した。これを本研究における「“心の癒し”のナラティブ」として分析した。一人の研究協力者から複数のエピソードが語られる場合があったため、研究協力者 11 名から得られた 49 例が分析の対象となった。“心の癒し”が具体的なエピソードとして語られていない、あるいは“心の癒し”と関連する部分が見出されなかった語りは分析から除外した。構造分析では、時系列に配置された“心の癒し”のナラティブをつなぎ、語りがどのように展開していったのかパターンを記述した。この作業を新しいパターンが得られなくなるまで繰り返した。その後、親近性のある“心の癒し”のナラティブ同士を集約し、これらの抽象度を高めて簡潔な表現で再記述した。本研究ではこれを「テーマ」とみなし、研究協力者が実際に表現した言葉を用いて名前をつけた。テーマ分析では、テーマをつないで文章にした「ストーリーライン」を作成し、構造分析によって見出されたパターンの中で研究協力者が何を語っていたのか、その具体的内容を記述した。以上の分析は結果の信頼性を確保できるようナラティブを専門とする指導教員の助言を受けて実施し、個別のストーリーラインが維持されるよう表現した。

5. 倫理的配慮

本研究は、所属大学を通じて研究協力を依頼する文書と研究計画書を送付し、研究協力者の承認を得てから実施した。調査開始前には、研究の目的、方法、情報の取り扱い等に関して書面と口頭で説明し同意を得た。研究協力者には調査中及び調査後の同意撤回が可能である旨もあわせて説明し、承諾を得た内容のみを記載した。

Ⅲ 結果

1. 語りのパターン

本研究では、構造分析とテーマ分析を組み合わせ、語りの構造とそこで語られた内容を統合的に分析した。構造分析とは、「ストーリーがどのような構造を持って語られるかに着目し、小説などに見いだされる『起承転結』のような語りの枠組みを、経験についての語りに見出そうとする」（田口・宮坂, 2015）分析手法である。本研究における構造分析では、この前提に基づいて研究協力者が“心の癒し”にまつわる経験を語る際に共通して見られる構造上の要素を抽出し、研究協力者の語りのパターンを示した。テーマ分析とは、個々の語りの全体性を保ちながらストーリーの中で何が語られているかに着目する分析手法である。本研究におけるテーマ分析では、構造分析の結果から見出された語りのパターンの内容について示した。

その結果、刑務所ラジオにおける“心の癒し”についての語りには、以下の3つの構造上の要素が見出された。なお、3つの構造上の要素は田口・宮坂 (2015, 2019) に則り〈状況〉〈行動〉〈効果〉と名付けた。〈状況〉：“心の癒し”を意識する契機となった経験や刑務所ラジオを取り巻く状況についての語りを示す。〈行動〉：刑務所ラジオの制作・放送にあたり、“心の癒し”を意識して実行した具体的な行動についての語りを示す。〈効果〉：刑務所ラジオの制作・放送を通して生じた変化についての語りを示す。

これらを構造分析の基本構造である「起承転結」の枠組みから分析すると、研究協力者の語りは〈状況〉を「起」として〈行動〉、すなわち「承」または「転」が生じ、〈状況〉をふまえた〈行動〉によって「結」にあたる〈効果〉へと展開していた。したがって、研究協力者の語りは系列的な構造を有していることが明らかとなった。以下、図1で示すように研究協力者の語りのパターンについて記述していく。

〈状況〉は、X) と Y) の2パターンが見出された。X) は受刑者の生育環境や心情から“心の癒し”を意識したで23例だった。Y) は限られた空間の特殊性から“心の癒し”を意識したで26例だった。“心

の癒し”を意識した行動がとれずに〈状況〉で完結しているナラティヴは見出されなかった。

〈行動〉は、ア)、イ)、ウ)の3つに分類され、さらにイ)はイ-①)、イ-②)の2つに分類された。ア)は“心の癒し”を意識したDJの工夫で23例だった。イ)は“心の癒し”を意識した番組作りの工夫で17例だった。その内、イ-①)は外部の新鮮な情報で8例、イ-②)リクエスト式の番組設定で9例だった。ウ)は刑務所内の秩序や規律を守るための工夫で9例だった。〈状況〉がX)の場合の〈行動〉はア)の1パターン、〈状況〉がY)の場合の〈行動〉はイ-①)、イ-②)、ウ)の3パターンが見出された。

〈効果〉、すなわち“心の癒し”を意識して実行された行動が何らかの変化をもたらしたとする語りが得られたのは38例で、i)～vi)の6つに分類された。i)は安心感を育むで5例だった。ii)は内省的思考の促進で14例だった。iii)は外部との繋がりで4例だった。iv)は孤独感の緩和で8例だった。v)は受刑者を理解しようとする声の誕生で4例だった。vi)は社会の受け皿づくりで3例だった。〈状況〉がX)、〈行動〉がア)の場合の〈効果〉はi)またはii)の2パターンが見出された。〈状況〉がY)、〈行動〉がイ-①)の場合の〈効果〉はiii)の1パターン、

〈状況〉がY)、〈行動〉がイ-②)の場合の〈効果〉はiv)またはv)の2パターンが見出された。〈状況〉がY)、〈行動〉がウ)の場合の〈効果〉はvi)の1パターンが見出された。

以上より、〈状況〉〈行動〉〈効果〉の3つの構造上の要素の中で、研究協力者の語りの6つのパターンが見出された。また、〈状況〉がX)の場合は、“心の癒し”を社会復帰後の生活にいかに関係していくのか、個人としての人間性の回復に重点を置いた語りが展開されていたのに対し、〈状況〉がY)の場合は、“心の癒し”を刑務所内の生活でいかに実現できるのか、社会的あるいは空間的制約がある組織としての立ち回りに重点を置いた語りが展開されていた。したがって、研究協力者の語りは系列的な構造をしているとともに、心理的役割と社会的役割の両面を意識しながら展開されていることがわかった。

2. 各パターンのストーリーライン

続いて、構造分析によって見出された語りの6つのパターンの中で研究協力者が何を語っていたのかについて示す。以下、典型的な例や象徴的なエピソードなど語りの一部を引用しながら各パターンで語られた内容をストーリーラインの形式で提示してい

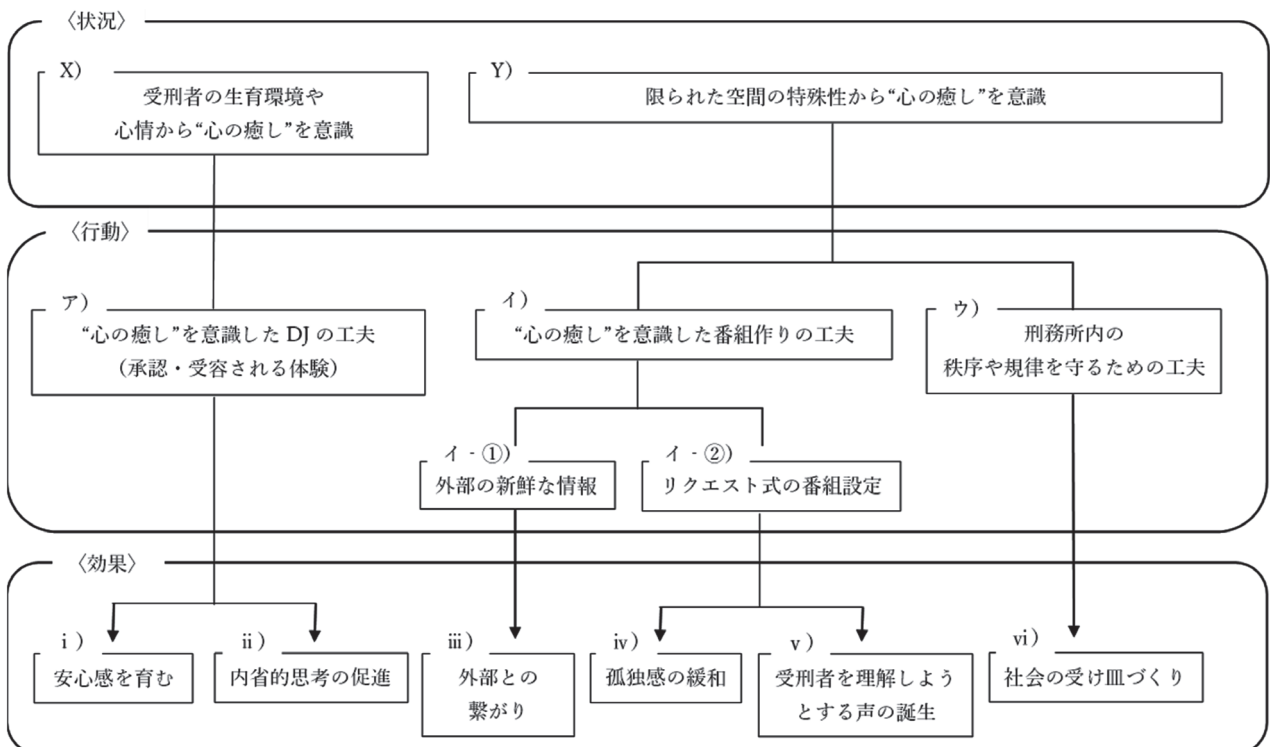


図1 “心の癒し”のナラティヴの構造とテーマ

く。

X) →ア) → i) 受刑者の安心感を育む一助となった語り

この語りは〈状況〉がX), 〈行動〉がア), 〈効果〉が i) のパターンであり, A1・A2・C3・D1・E1の5例だった。これらから得られた共通のストーリーラインは以下の通りである。

受刑者の多くは貧困や虐待など過酷な環境で育ち、自分の話に耳を傾けてくれる他者との関わりに乏しさが見られた。そのため、刑務所ラジオのDJは対等な関係性に徹することで受刑者との情緒的交流を図った。こうした受刑者を評価しない態度は、受刑者がわかってほしい気持ちを表現する際の安心感に繋がり、リクエストカードが採用された受刑者に心が震える体験を提供することができた。

心が震える体験について、A1は「今まで人に褒められたり、慰められたりしたことがなかった」と涙を流す受刑者を例に挙げ、「メッセージを読まれるということは語りの主人公になること、DJの役割は（贖罪教育の）前提となる安心を提供し、この根を育てること」と語った。D1はリクエストカードが採用された受刑者の様子を「まるで宝くじが当たったかのような喜び」と表現し、E1は「リクエスト曲をかけてもらうために組織票を送ったり、わざと感動的なメッセージを送ったりしてくる」受刑者への驚きを語った。A2は「自分の書いたメッセージが認知され、共感されていることや多くの中で自分のメッセージが読まれたという達成感、嬉しさが“心の癒し”に繋がっている」とした。

X) →ア) → ii) 受刑者に内省的思考の促進をもたらした語り

この語りは〈状況〉がX), 〈行動〉がア), 〈効果〉が ii) のパターンであり, 研究協力者 A1～E2 全員に見られ, 14 例だった。これらから得られた共通のストーリーラインは以下の通りである。

DJに読み上げられるメッセージの大半を占めるのが、大切な相手に迷惑をかけたことに対する反省や後悔、社会復帰に向けた決意表明であった。その背景には、他者との関わりの中で自分の価値を感じ

られず、生きづらさから逃避するため刹那的に犯罪を選択した受刑者の存在があった。メッセージを書き、DJから代読され、応答された自身のメッセージを聴く行為は、懸命に言語化した素直な気持ちを他者から承認・受容される体験であるとともに、受刑者の内省的思考を促進し、過去やまわりに目を向ける糸口となった。

受刑者の抱える生きづらさの一つに、「どのようにして自分をわかってもらえばよいか学ぶ機会が少なく、コミュニケーションの取り方もよくわかっていない」、「内面の自信のなさやそういうところを見せられない」(A3)といった対人関係の課題があった。そのため、DJの「かけがえのないあなたがこの時どんな思いでメッセージを送ってきたのか、全部自分事として聴く」(C3)の姿勢は、受刑者がこれまで抱えてきた気持ちを整理し、表現する行為を後押ししていた。A2は「リクエストメッセージの形で自分について書くことは自発的に取り組みやすい」とし、「自分の素直な気持ちと向き合うと同時に読まれることを意識したメッセージを主体的に送ることによって他者とのコミュニケーションを図ろうとしている」と語った。

Y) →イ - ①) → iii) 受刑者に外部との繋がりを示した語り

この語りは〈状況〉がY), 〈行動〉がイ - ①), 〈効果〉が iii) のパターンであり, A1, A3, C3, E2の4例だった。これらから得られた共通のストーリーラインは以下の通りである。

社会から切り離された閉鎖的な空間で過ごす受刑者は、大切な相手との繋がりと同時にリアルタイムで動く社会との繋がりを渴望していた。そのため、生（なま）の感覚にこだわった番組作りは、新鮮な情報や時事ネタに触れる機会に限られる受刑者のニーズと合致していた。決められた時間に決められた場所で聴く特徴と相まって、受刑者の多くは刑務所ラジオを時の流れや外部との繋がりを実感するツールとしても活用していた。

生（なま）の感覚を伝えるため、外部のDJ（A1, C3, E2）は「今日は寒いですね」「来る途中で〇〇を見ました」など時節を意識した表現を積極的に取

り入れていた。A1は「臨場感を失わないようメッセージの下読みはせず、自分の心の変化を素直にコメントしている」、「刑務所を離れて出逢ったこと、経験したことを話のタネとしてストックし、次の放送で伝えている」とその工夫について語った。リクエストカードには「あと〇回聴けば外に出られる」といったメッセージが頻繁に登場し、「外部の情報が手に入る、外部の人と繋がれるってだけで嬉しい」といった感想も寄せられていた。

Y) → イ - ②) → iv) 受刑者に孤独感の緩和をもたらした語り

この語りは〈状況〉がY), 〈行動〉がイ - ②), 〈効果〉がiv) のパターンであり, A1, A2, B2, C1, D1, E1 の8例だった。これらから得られた共通のストーリーラインは以下の通りである。

刑務所ラジオがリクエスト番組形式を採用しているのは、書き手と聴き手との交流が最も際立つシンプルな構成である点が大きかった。読み上げられるリクエストカードの内、大切な相手に宛てたメッセージに次いで多いのが、DJや刑務作業工場の先輩、後輩に宛てた感謝や労りであった。何らかの気持ちの変化や他者に対する思いが託された一人のメッセージがスピーカーを通して全体へと共有されることで、孤立感が和らぎ、社会復帰の意欲へと繋がっていた。

聴き手となった受刑者からは「他の受刑者の気持ちがわかり、自分も頑張っていこうと思った」「つらい、悲しい、頑張ろうを自分の体験や気持ちと重ね合わせた」など書き手への共感を示す感想が寄せられていた。このような受刑者の反応に対し、A1は「お互いに顔もわからない匿名ならリクエストカードを書く…彼らは書きたい、そして聴いてほしいんです」、A2は「一人の受刑者の頑張るというメッセージが連鎖的にメッセージを与えているように感じられる」と語った。当事者DJであるB2は「選曲とか内容とか、どんな気持ちで書いているんだろなって思いながら自分の気持ちを乗せさせてもらった」と率直に感じたことをDJとしての語りに反映させているとした。

Y) → イ - ②) → v) 受刑者を理解しようとする声を誕生させた語り

この語りは〈状況〉がY), 〈行動〉がイ - ②), 〈効果〉がv) のパターンであり, A1, A2, E1, E2 の4例だった。これらから得られた共通のストーリーラインは以下の通りである。

刑務所の暮らしや受刑者の思いを発信できる刑務所ラジオは、番組の制作・放送に直接携わっていない第三者にとって受刑者を知るツールとして役立っていた。出所後の再犯率が高い理由の一つに、元受刑者の居場所の持ちにくさがあった。そのため、刑務所ラジオを通して誕生した受刑者を理解しようとする新たな声は、受刑者の社会復帰を支える第一歩となっていた。

新たな声の誕生とは、受刑者がリクエストカードに綴った意味内容を理解するだけではなく、受刑者の思いを受け取り、その体験を通して生じた第三者の変化である。その変化によって誕生した受刑者を理解しようとする視点が第三者に広がっていく波及的な意味もそこには含まれている。A2は「日頃どういう思いで受刑者が作業しているかわからなかったが、放送を通して受刑者の考えや気持ちを知ることができた」と語った。番組を聴いた第三者からE2のもとに「受刑者への考え方が変わりました」「親戚や兄弟を思う気持ちは同じだということがわかりました」といった反応も来るようになった。A1は「環境という要因を軽んじられがち」と前置きした上で、「社会に戻ってゼロからスタートする際に家族や友人をはじめ関わってくれる人がいればきっと立ち直れる」と刑を終えた受刑者に対する見方を少し柔軟にしたいとその願いを語った。

Y) → ウ) → vi) 社会の受け皿づくりを目指した語り

この語りは〈状況〉がY), 〈行動〉がウ), 〈効果〉がvi) のパターンであり, A2, D1, E1 の3例だった。これらから得られた共通のストーリーラインは以下の通りである。

刑務所ラジオは非常に特殊な環境下で自己表現する大切な機会の一つであった。刑務所ラジオには、受刑者の社会復帰の意思を確認する側面もあることから、どのような形でも番組を継続することに重点

が置かれていた。その一方、刑務所で実施する以上、規律・秩序を守る工夫が求められていた。厳格なルールに則った放送は、刑務所の安全性を地域に保障し、受刑者が復帰する社会の受け皿を整えていく上でも不可欠であった。

組織としての規律・秩序を守るための判断に基づき、「ラジオ番組を通しての不正がないよう番組で採用するメッセージを選別している」「個人が特定できるような言葉を黒く塗りつぶす」（A2）など、受刑者の自己表現を制限せざるを得ない場合があった。また、DJ 個人の安全性を保障するため、「DJ は本名ではなく番組専用の名前を使い、電話で問い合わせが来た時に刑務所関係者かそうでないかがすぐにわかるようになっている」（D1）ところもあった。

Ⅳ 考察

1. 刑務所ラジオにおける“心の癒し”

分析の結果より、刑務所ラジオの制作・放送に携わる関係者のナラティブから6つの語りのパターンが見出された。これらは相互に影響しながら受刑者

の“心の癒し”の基盤となっており、6つのパターンの関係性に基づいて刑務所ラジオにおける“心の癒し”を構造化したものが図2である。

まず、“心の癒し”の土台となるのが、刑務所ラジオを媒介として外部や他者と繋がれる場を維持することであった。何が何でもメッセージを読んでもらおうと試行錯誤する受刑者像からは、切り離されていた社会や他者との繋がりの回復が“心の癒し”には不可欠であることがわかった。次に、“心の癒し”を構成する上で重要な役割を担うのが、外部や他者と繋がれる場の中で承認・受容される体験を積み重ねていくことであった。受刑者は外部や他者との繋がりの回復と同時に希薄化せざるを得なかった自分自身との繋がりを取り戻そうとしていた。刑務所ラジオは、投稿されたメッセージを明瞭に読み上げたり、DJ のコメントを一方的に聴かせたりする場ではなく、リクエストされた曲について一緒に話し合う場である。つまり、受刑者の話を聴き、言葉を返すことに徹する刑務所ラジオの中だからこそ、受刑者はDJ との交流を喜び、自己表現するための安心感を育むことができていた。この承認・受容される

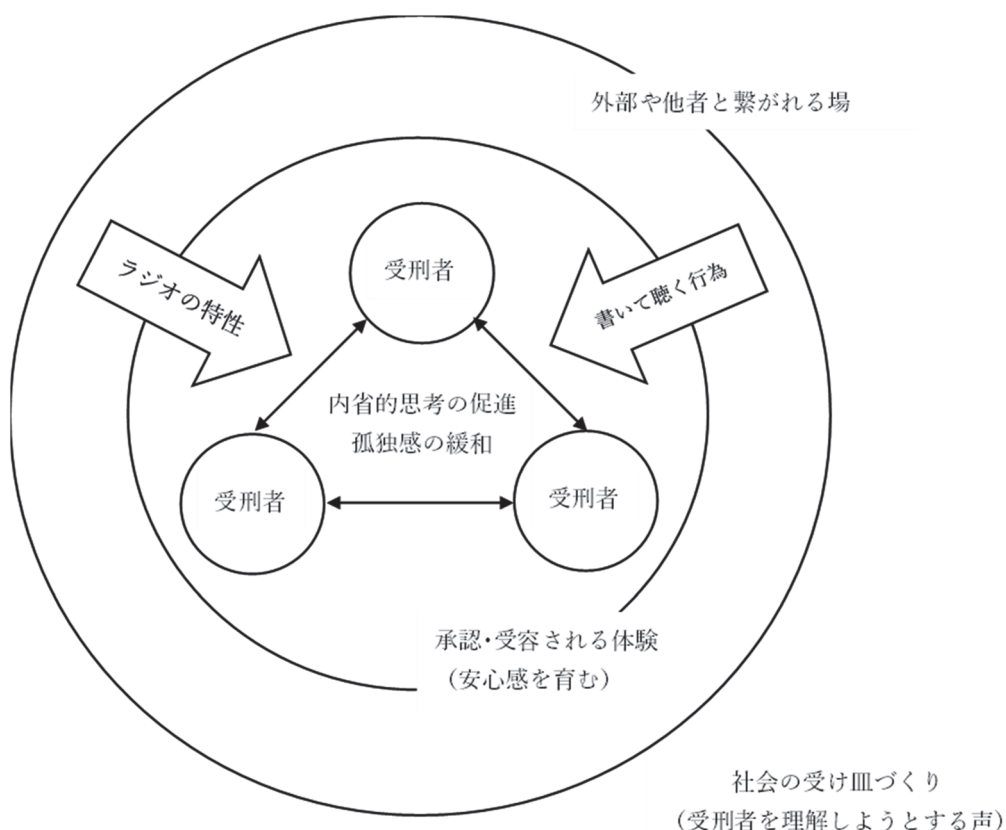


図2 刑務所ラジオにおける“心の癒し”の基盤

体験の積み重ねはラジオという音声メディアの特性やリクエストカードを書いて聴く行為によって支えられており、その結果、受刑者には孤独感の緩和や内省的思考の促進といった変化が生じていた。そして、筆者をはじめ聴衆として刑務所ラジオに携わった第三者には、刑務所ラジオを通して「知らなかった」受刑者の背景を想像し、自分事として理解しようとする新たな声が誕生していた。これらは、受刑者に“心の癒し”をもたらそうとする中で生じた二次的な変化ではあるものの、受刑者の社会復帰には欠かせない社会の受け皿づくりの一端を刑務所ラジオが担っていることがわかった。

以上より、刑務所ラジオにおける“心の癒し”とは、外部や他者と繋がる場の中で承認・受容される体験を積み重ね、受刑者に孤独感の緩和や内省的思考の促進などの変化を生じさせることであるとわかった。

2. 刑務所「ラジオ」であることの意味

1) 安全な枠組み

刑務所ラジオは、「ラジオ」であるからこそ、受刑者に安全な枠組みの中での体験を保障することができていた。一般に日常生活におけるコミュニケーションは2人以上の人間が話し手と聴き手の役割を交換しながら相互に情報伝達を行っている。対して、テレビや新聞等のマスメディアは「送り手と受け手の役割が固定し、少数の送り手が情報を送り、多数の受け手は情報を受け取るという一方向のコミュニケーションとなっている」（船津，2006）。少数の送り手が多数の受け手に情報伝達を行う点はラジオも同様だが、メッセージのやり取りを介して話し手と聴き手の役割を交換し、疑似的な対話を成立させることができる双方向性はラジオの利点である。また、視覚的な情報がなく、コミュニケーションの手段を声に限定しているラジオは、他のマスメディアと比較して匿名性が高い点も特徴である。iv) 受刑者に孤独感の緩和をもたらした語りでA1は「お互いに顔もわからない匿名ならリクエストカードを書く…彼らは書きたい、そして聴いてほしいんです」と述べており、ラジオの持つ匿名性は受刑者が自己表現を試みる上で必要な特性であることがわかった。さ

らに、その日、その時間にしか聴くことができず、始まり（オープニングトーク）と終わり（エンディングトーク）が明確である刑務所ラジオは、日常の延長とは異なる特別な場として機能していた。刑務所は刑を執行し、受刑者に改善更生を求める場である一方、これまでの過酷な環境、毎日の衣食住の確保、薬物等への依存から逃れることができる場でもある。A3はii) 受刑者に内省的思考の促進をもたらした語りの中で「何とかしなくてはならないがこれまで自分の中で棚上げしてきたことや押し殺してきた感情や気持ち、囚われてきた考えに目が向いてくのではないだろうか」とも述べ、刑務所ラジオに受刑者が耳を傾ける理由を推察していた。

2) 他者の声を介して自己が再構成されるプロセス

刑務所ラジオにおける“心の癒し”は、受刑者がリクエストカードの書き手であり、聴き手である二重性によって生じていた。受刑者はリクエストカードにメッセージを書く行為を通して心の内を整理し、DJによるメッセージの代読と応答を介して自分自身との繋がりを取り戻そうとしている。i) 受刑者の安心感を育む一助となった語りでA1はメッセージをDJに読まれることを「語りの主人公になること」と表現しており、船津（2006）は「自我は語ることによって構成され、語り直されることによって再構成されるようになる」とした。つまり、受刑者はメッセージを書くことで自分を語り、DJがそのメッセージを語り直すことで自己の存在を確認し、新たな自己を発見しようとしていた。ここで特筆すべきは、受刑者が“書くことができた”思い出を投稿している点である。“書くことができた”思い出とは、書き手である受刑者の根幹に関わる経験であり、DJによる語り直し以前にメッセージを取り上げることそのものが承認・受容の体験になる場合があった。また、社会復帰に向けた決意表明を書く行為は、書いた内容を遂行できるよう自身の行動を変化させていくきっかけの一つとなっていた。その一方、受刑者は聴かれることを意識したリクエストカードを書くことで他者とのコミュニケーションを図っていた。受刑者の“心の癒し”，特に内省的思考の促進に求められるのが、他者を通して自身

を客観的に振り返る過程である。刑務所ラジオはこの過程を放送で代替しており、発信されたメッセージはスピーカーを通して他の受刑者へと伝達される。そのため、書き手である受刑者は放送を聴く行為を通して自身を客観的に受け止めるとともに他者から客観的に受け止められる体験をしていた。また、放送を聴いて他の受刑者に共感したり、他の受刑者からの共感を得たりすることは、孤立感の緩和にも役立っている。大切な相手に宛てたメッセージの次に、DJ や同じ境遇にある他の受刑者に宛てたメッセージが多いことから、自身のメッセージを“聴かれているもの”として意識し、感謝や労りの表現を通して他者と繋がっている感覚を強めていることがわかった。

V まとめと今後の課題

1. 本研究の意義

本研究により、刑務所ラジオの制作・放送に携わる関係者のナラティブから“心の癒し”の基盤となる6つの語りのパターンが見出された。その結果、刑務所ラジオにおける“心の癒し”とは、外部や他者と繋がる場の中で承認・受容される体験を積み重ね、受刑者に孤独感の緩和や内省的思考の変化を生じさせることであるとわかった。刑務所ラジオはあくまで受刑者に与えられた娯楽の一つであり、自身の罪を反省し、他者を思いやる心を育てるための教材ではない。しかし、刑務所ラジオによってもたらされた“心の癒し”は受刑者が自身の過去や他者との関係性を見つめ直し、社会復帰に向けた新しい自己を再構成するための手がかりとなっていた。受刑者が社会復帰する際に不可欠となるのが贖罪教育に求められる被害者への謝罪である。藤岡（2005）は謝罪を定義づける要素の一つとして「後悔、悲しみ、明らかな恥辱など、加害者が感情を表現すること」を挙げており、反省や後悔、決意の表現をDJに受け入れてもらう体験は謝罪と地続きであると言える。A1の言葉を借りると、贖罪教育とは「もらったぬくもりをまた別の人に与える」ことでもある。刑務所ラジオが担う心理的役割とは、まさに贖罪教育の前提となる「ぬくもり」を与えることであり、

自分の声を聴いてもらっているという手ごたえは受刑者の滞ってしまった時間を社会復帰に向けて少し進めることとなった。また、本研究では関係者のナラティブを集約したことで、これまで個人的な体験として把握されてきた“心の癒し”の言語化が促進された。本研究を通して、リクエストカードに込められた「一瞬でも変わろうとするその瞬間」を探り、行間に隠れた“声なき声”に目を向けた関係者の体験が複数のフィールドで共有されたことは受刑者の社会復帰を支援する上で大きな意味を持っていた。

2. 今後の課題

再犯防止推進の加速化を背景に各刑務所では個々の受刑者の特性に応じた柔軟な指導・支援がすすめられている。2025年6月1日から施行される改正刑法では、懲役と禁錮が一本化されて「拘禁刑」となり、より立ち直りに向けた教育に重点が置かれていくことが見込まれる。こういった政策動向に対応するべく、今後の刑務所には地域との連携強化ならびに教育・医療・心理・福祉など関連領域を取り入れた包括的な支援が一層求められていくだろう。地域との連携、すなわち地方公共団体や民間協力者等との連携は第一次再犯防止推進計画（2017年12月）、第二次再犯防止推進計画（2023年3月）にも明記されている。すでに犯罪心理学や司法臨床心理学の領域では、再犯の予防と本人の福利を両立させるグッドライフモデル（相澤育郎、2019参照）の実践や島根県の官民協働刑務所「島根あさひ社会復帰促進センター」で組織されている国内初の刑務所内治療共同体（Therapeutic Community:TC）などが注目されている。その一方で、「本音なんて言えない」受刑者にとっては、クラブ活動や慰問行事など余暇時間帯における娯楽的活動のもつ機能の中で社会復帰に向けた変化を支えていく必要がある。刑務所ラジオにおける“心の癒し”は、まさに娯楽的活動に積極的な意味が加わったものである。たとえ改善更生に繋がるようなメッセージを書くことができなかったとしても自分にとって思い入れのある曲がかかっていることそのものが行為主体感の回復になっており、これは臨床心理学の共通基盤とも言える。この娯楽的活動のもつ機能を社会復帰と再犯防止を重視

する社会制度の中にいかに落としこみ、犯罪心理学や司法臨床心理学的な見地と交差させていくのが今後の課題である。

謝辞

本研究を実施するにあたり、ご協力いただいた方々ならびに研究協力者の皆様、分析の方向性等について厚くご指導・ご助言をいただいた立命館大学大学院人間科学研究科森岡正芳先生、卒業論文指導を通して研究のきっかけをくださった立命館大学産業社会学部坂田謙司先生に深く感謝申し上げます。

文献

相澤育郎 (2019). グッドライフモデルと犯罪・非行からの立ち直り. 犯罪社会学研究, 44, 11-29.

秋田行範 (2018). 富山刑務所における「七三〇ナイトアワー」の実施について. 刑政, 129 (2), 22-29.

藤岡淳子 (編) (2005). 被害者と加害者の対話による回復を求めて—修復的司法における VOM を考える—. 誠信書房.

船津衛 (2006). コミュニケーションと社会心理. 北樹出版.

芳賀美幸 (2022). 刑務所ラジオにみるリスナー参加の意義—豊橋刑務支所「リクガメ」の事例から—. 社会情報学会 (SSI) 学会大会抄録.

芳賀美幸 (2024). 刑務所ラジオにみる「承認」のコミュニケーション—受刑者と DJ へのインタビューから—. 社会情報学, 12 (3), 37-53.

法務省 (2017・2023). 再犯防止推進計画.
https://www.moj.go.jp/hisho/saihanboushi/hisho04_00036.html
 (2024 年 11 月 15 日情報取得)

岩松真也 (2018). 「けやきの散歩道」の役割. 刑政, 129 (2), 30-35.

小玉美意子 (2012). メジャー・シェア・ケアのメディアコミュニケーション論. 学文社.

近藤優佳 (2017). ラジオは人を「癒す」のか—刑務所ラジオから見た社会更生におけるラジオの役割—. 2017 年度立命館大学産業社会学会卒業論文撰集「for/est」, 1-31.

Labov, W., Waletzky, J. (1967). NARRATIVE ANALYSIS: ORAL VERSIONS OF PERSONAL EXPERIENCE. Essay on the Verbal and Visual Arts, Proceedings of the 1966 Annual Spring Meeting of the American Ethnological Society, University of Washington Press, 12-44.

松井弘 (1986). ミスター・DJ (処遇実践レポート). 刑政, 97 (9), 70-73.

村崎誠三 (2018). 苗穂ラジオステーションの取り組みについて. 刑政, 129 (2), 36-45.

Riessman, C. K. (2008). *Narrative Methods for the Human science*. California: SAGE publications. 大久保功子, 宮坂道夫 (監訳) (2014). 人間科学のためのナラティブ研究法 (第一版). クオリティケア.

坂田謙司 (2019). 限定された空間とメディアの社会史研究に向けて.
 立命館産業社会論集, 54 (4), 107-121.

田口めぐみ・宮坂道夫 (2015). 看護師がチームワークの中で経験する違和感・ジレンマについてのナラティブ分析. 日本看護倫理学会誌, 7 (1), 45-53.

田口めぐみ・宮坂道夫 (2019). 看護師が自己規範とチーム規範との不一致によって経験するジレンマについてのナラティブ分析. 日本看護科学会誌, 39, 350-358.

外山ひとみ (2010). ニッポンの刑務所. 講談社現代新書.

(2024. 4. 24 受稿) (2025. 9. 20 受理)
 (ホームページ掲載 2025 年 10 月)